

混色する小さなせかい

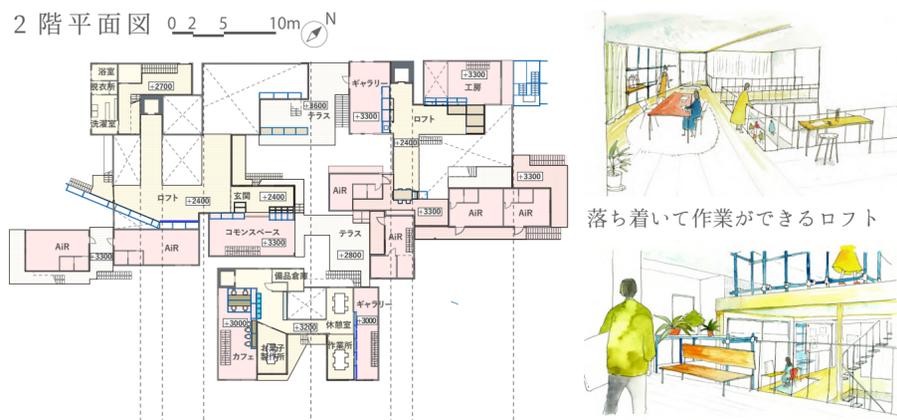
—横浜市黄金町の障がい者表現支援施設—

ダウン症の弟は「施設での生活はやりがいが無い」と家族に言う。その一言から、**社会との接点がある支援施設が必要だ**と感じた。それと同時に姉として、弟のような人たちが**自宅のほかにも安心して生活できる居場所**があってほしいと思った。

長い時間をかけて施設と関わり、その中で施設内の人や街の人と様々な形で関わっていく。それにより施設内にとどまらず、街の中にも少しずつ彼らの居場所が作られていく。

もし急に家を離れることになっても、自宅とは別の居場所があるという状況を作りたい。

利用者さんの**日常の延長**になれるような施設を提案する。



01: ダウン症の弟の閉じたせかい



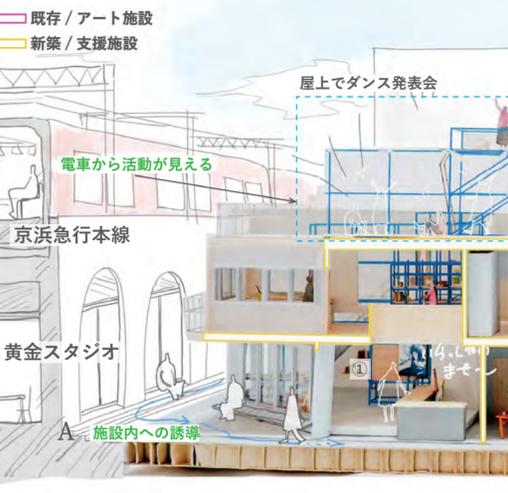
私にはダウン症の弟がいます。彼は現在、支援施設に通っていますが、施設での生活は**社会との接点が少ない**ためやりがいが無いと言っています。弟が外とつながることのできる**支援施設**を作れないかと考えました。

03: アートによって変化した町、黄金町



約20年前まで歓楽街だった。近年ではインディーズアートを用いてエアークレンジングがされ、京浜急行の高架下を中心に**アートの拠点**が作られている。

05: 混色境界が使われていくことで、様々な空間が生まれる



02-1: 障がい者支援施設 × AiR



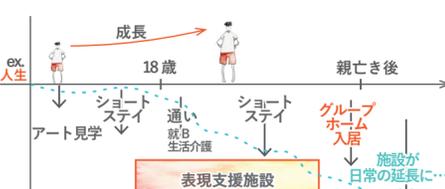
アーティストインレジデンス(以下AiRとする)と障がい者支援施設を複合することで、アートを通じた外とのつながりを作る。

04- 設計手法 1: 塗り重ねる



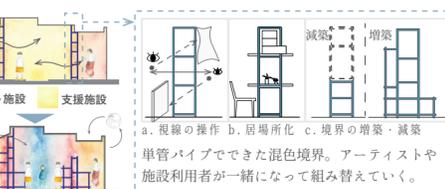
計画敷地の既存建物の細街路側を真二つに壊し、支援施設を建てる。建物は時間をかけて公共化していく。

02-2: 長期利用による居場所づくり



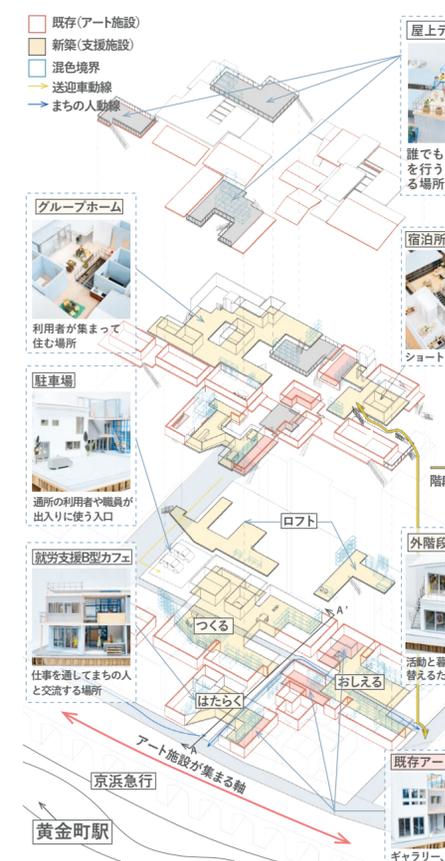
人生のフェーズごとに長期利用していくことで、**自宅以外の安心できる居場所**を作る。利用者さんの**日常(家族の近く)の延長**にある施設であることを目指す。

04- 設計手法 2: 混色する



既存 (AiR) と新築 (支援施設) の間に、利用者が組み替えることができる**仮設の間仕切壁**「混色境界」を挿入する。利用者の意思に沿って様々なかたちに変化していく。

06: 支援施設詳細



07: 濃淡のある居場所を作る建築的操作

